開催報告

『家の光』創刊100周年記念
~第66回全国家の光大会

～みんなで手をつなぐ協同の輪　食・農・地域に生まれる好循環～

『家の光』創刊100周年記念第66回全国家の光大会を2月13日、神奈川県・パシフィコ横浜国立大ホールで開催し、愛読者代表や教育文化活動関係者など約2,000名が参加しました。

全国家の光大会前日には、東・中・西日本の3地区に分かれて都道府県代表体験発表大会が行われ、「記事活用の部」「普及・文化活動の部」に、都道府県代表者58名が臨みました。

そして、翌日の全国家の光大会では、都道府県代表体験発表大会で選出された9名が発表しました。審査の結果、「記事活用の部」は和歌山県の川瀬彰子さんが志村源太郎記念賞（発表内容は『家の光』6月号に掲載）に、「普及・文化活動の部」は岡山県ＪＡ晴れの国岡山の福原正恵さんが全国農業協同組合中央会会長賞に輝きました。

ここでは、「普及・文化活動の部」で家の光協会会長特別賞に選ばれた3人の発表を紹介します。

●家の光協会会長特別賞
●全国農業協同組合中央会会長賞

“最強の武器”を手に次世代へ つなげる 広がる ワクワクを！

岡山県
福原 正恵（43）

所属ＪＡ　ＪＡ晴れの国岡山
所属部署　真庭南部アグリセンター
組合員数　139,152名（うち正組合員80,507名）

今から、15年前、私は尊敬する上司のパソコン操作者として、第52回全国家の光大会に参加しました。そのとき、「いつか私もこの壇上に立って発表したい！」と強く感じたことを今でも鮮明に覚えています。

そして今、この場で発表できることに感謝していると同時に、ワクワクもしています。

ＪＡ晴れの国岡山は、岡山県の８ＪＡが合併し、令和２年４月に誕生しました。『家の光』の普及については、合併後は８統括本部ごとの取り組みが引き継がれていましたが、今年度、初めて各統括本部すべてで目標が設定され、晴れの国岡山一丸となり取り組んでいます。その結果、令和６年度『家の光』12月号において前月対比が目標を上回る2,840部の増部を達成し、ＪＡ別の増部数で全国１位の結果となりました。

私は真庭南部アグリセンターで、女性部事務局をはじめ、あぐりスクールの開校を通じた「食農教育活動」、巡回人間ドックなどの「健康増進活動」、そして『家の光』の普及・推進などの業務に携わっています。

真庭市は岡山県の北部に当たり、令和６年３月時点で高齢化率は40.2％となっており、年々増加しています。また、若者の県外への流出も多く、過疎化の一途をたどっており、昨年には「消滅可能性自治体」と判定されてしまいました。ＪＡとしても、ただでさえ少なくなってきている若い世代とのつながりが希薄になり、課題として取り上げられているのが現状です。

本日は、このような中山間地域でも取り組める、若い世代に向けた「家の光三誌」を活用した活動についてご紹介します。

まず1つめは、フレミズ世代とＪＡの渉外担当の接点となる「ライフプランセミナー」です。令和5年度時点、中国・四国地区のＪＡでは晴れの国岡山が初めての開催と聞き、「今後につなげるためにも責任重大だな」という不安と、「真庭地区からみんなを引っぱっていってやるぞ！」というワクワクでいっぱいでした。

そもそも、なぜ真庭地区で開催できたのか……。それは、フレミズ部員が1度に13名増えたことが大きな要因です。真庭地区のフレミズは、結成した平成28年には12名の部員が在籍していましたが、その後は活動の低迷により、令和5年4月時点では6名にまで減少してしまいました。

部員募集のチラシ配布や、女性部に紹介を依頼しても増やすことはできず、「やはり真庭地区には食や農に関心のある若い世代はいないのか……」と悩んでいたところ、女性部が運営しているカフェに、若いママさんグループが安心安全なお弁当を求めて来店されました。

それをきっかけに女性部長がＪＡや女性部の話、その女性部の中にフレッシュミズというグループがあることを話してくれました。そして、令和5年の夏にフレミズに興味を持ったママさんが仲間に声をかけ、13名が新規加入し、6名から19名へと大幅に増えたのです！

そんななか、『家の光』を活用したライフプランセミナーを全国で開催していることを知りました。地域住民の暮らしに寄り添うこともＪＡのたいせつな役割！！　「これはＪＡ事業を知ってもらうよい機会ではないか！？」「このチャンスを逃してはだめだ！」と考え、新規部員のリーダーへライフプランの重要性を伝えたところ、興味を示してもらい、開催に向け動き始めました。

まずは、より多くの方に気軽に参加してもらえるよう、女性部が運営しているカフェのケーキとコーヒーを提供し、おしゃべりを楽しみながらの勉強会としました。さらに、別室では女性部による託児を準備し、子育て世代に参加してもらいやすい環境を女性部フルサポートのもと整えました。

その結果、13名の方から参加申し込みがあり、そのうちフレミズ部員でない方は7名でした。

また、このセミナーがＪＡとフレミズとのよい橋渡しになればと、当日は共済担当部署に協力を依頼しました。共済担当者も、過疎地域でフレミズ世代との接点をつくることができたことはありがたかったようで、すぐに話が進みました。

当日は共済担当者が司会進行をし、さらにはライフプラン作成のアドバイザーとして、グループの輪にも入ってもらいました。

終了後の参加者アンケートで「お金の流れを考えるきっかけになった」や「夢を描くのによい機会となった」などの声をいただき、セミナーをとおして人生設計のヒントを与えることができたと感じています。また、セミナー後に2名が新た

な部員となり、とてもうれしく感じました。

ライフプランセミナーを今後も継続して実施し、世代やニーズに合った提案を続けることが、ＪＡ事業を充実・強化する基盤になると確信しています。

２つめは、「『ちゃぐりん』を活用し、ＪＡのファンになってもらい、ワクワクを広げよう！」作戦です。

昨年６月、他県で共済担当者が、ＪＡこども共済加入家庭を訪問するきっかけづくりのため『ちゃぐりん』を活用した事例を知り、「これは使えるかも！」と思い立ちました。ライフプランセミナーでつながった共済担当者とフレミズとの関係を、「訪問」することで、さらに深めるためです。

真庭地区のフレミズは、令和６年度には先に紹介したライフプランセミナーを通じて21名まで増加、その大半がＪＡとの関わりが少ない部員です。そこで、『ちゃぐりん』8月号を全部員へプレゼントし、同時にＪＡのＰＲをしてもらおうと考えました。すぐに上司に相談し、共済部長から各支店長へと内容をつなげてもらうことで話をまとめました。

先ほど説明したとおり、フレミズ部員の大半がＪＡの事業をまったく利用したことがありませんでしたので、共済担当者も若い方のところへ行くための会話の糸口となり、よい提案だったようです。すぐさま部員に承諾を得て共済担当者と帯同し、21名全員に『ちゃぐりん』を手渡し、食農教育のたいせつさと、それを支えるＪＡのＰＲをおこなうことができました。

部員のなかにはＪＡの事業は農業に関することのみというイメージを持っていた方が多く、信用や共済事業もおこなっていることを認識していただくよい機会となりました。また、共済担当者にとっても、この取り組みで建物更生共済や自動車共済契約の実績獲得などがあったのですが、なにより担当地区の若い方との接点を持てたことが収穫になった、と感謝の言葉をもらいました。

このように、私たちの部署は、他の部署と連携をすることで「最高のＪＡＰＲ請負人」になれるわけです。そのツールとして「家の光三誌」という“最強の武器”を私たちは手にしています。この「家の光三誌」がＪＡ内での結びつきとなり、事業の好循環を生み出すことができるのだと、身をもって体験できました。

そして、3つめとして、地域との結びつきにも『ちゃぐりん』がおおいに役立っています。真庭地区で長年継続している取り組みに「二宮金次郎賞」という事業があります。これは、薪を背負いながら本を読み勉強した二宮尊徳になぞらえて、管内の小学生を対象に勉学に励み、かつ、家の農業のお手伝いや、農業を学んだ児童・学年などの団体を表彰する事業で、平成16年から続いており、令和6年でなんと20年めを迎えました！

副賞として『ちゃぐりん』を全員にプレゼントしており、そこから定期購読につながることもあります。この取り組みによって、小学生やその保護者にたいし

てＪＡをしっかりＰＲしています。また、ここ数年は『家の光』2021年9月号に掲載されていた「新聞紙エコバッグ」を女性部さんに作ってもらい、その中に『ちゃぐりん』を入れて受賞者全員に配っています。

今日まで、個人で29名、団体で36組、延べ729名を表彰してきました。過去に受賞した児童の中には、家業を継いで生産者となり、ＪＡの組合員として活躍している方も多く、ＪＡの事業が地域の農業へ貢献できているんだと誇りに思っています。

また、学校になじめなかった子が受賞をきっかけに自信がつき、明るく意欲的になったと校長先生からお礼の言葉をいただいたこともありました。この言葉は、この事業を続けていくための大きな自信となりました。

「ワクワクする農業と地域の未来を」これは、当ＪＡのキャッチコピーです。次代を担う子どもたちとその保護者、そして地域をつなげることができる“最強の武器”である「家の光三誌」を、これからもおおいに活用し、ＪＡのファンをつくり、関係をつなげ、ワクワクをもっと広げていきたいと思います。

普及・文化活動の部

●家の光協会会長特別賞

組合員といっしょ！

神奈川県

弓削田 勝（50）

所属ＪＡ　ＪＡセレサ川崎
所属部署　組合員対策室
組合員数　67,244名（うち正組合員5,133名）

「組合員といっしょ！」 これは昨年4月に組合員対策室が発足したときにスローガンとして私が掲げた言葉です。農協の活動は組合員といっしょにやるという思いが込められています。ＪＡセレサ川崎は本日の会場がある横浜市と東京都に挟まれた川崎市一円を事業エリアとしており、川崎市は令和6年に市制100周年を迎えました。市内人口は155万人を超え、2030年までは人口増加

が続くと想定されている典型的な都市型ＪＡです。事業面では貯金残高は約1兆4,800億円、貸出金残高は6,000億円を超えて全国で2位となっています。

このような話をするとうらやましいと感じる方もいると思いますが、順調に見える事業基盤の裏では、両輪ともいえる組織基盤の弱体化が課題となっています。組合員組織のなかで、次の役員のなり手がいない、若い人が出てこない、活動をしても部員の3分の1しか参加しない、など協同組合として必要不可欠な人と人とのつながりが希薄になってきているのです。

そのような状況のなか、支店を中心とした組合員とのつながり強化を図るため、令和4年度に、今まで全支店にはなかった支店協同活動推進委員会を、新たに支店協同活動運営委員会として全支店に設置しました。支部長をはじめとする各組織の役員が委員となり、対話や地域の活動を実践できるよう整備し、令和5年度には一支店一協同活動の取り組みを開始しました。

令和6年度にはさらに組合員との関係強化に努めるために機構改革を実施、副組合長直下の組合員対策室を発足しました。各支店の協同活動をさらに活性化するために、支店協同活動行動計画書を全支店で策定、ＰＤＣＡサイクルをまわして協同活動を実践するようにしています。

協同活動の理解促進のため、『家の光』の普及にも力を入れてきました。令和3年度までは部数が減少傾向にありましたが、令和4年度から増部を続け、今年度は女性部だけでなく准組合員を含めた組合員に読んでもらいたい雑誌として普及活動を展開しました。また、支店長研修会を実施したのちに役員と組合員対策室で支店巡回をおこない、職員の理解促進にも力を入れてきました。その結果、令和6年度12月号にて正組合員普及率を30パーセントまで回復することができました。

今年度も全支店において一支店一協同活動を実施していますが、今年度の各支店の協同活動は農業や地域と連携した内容も多くなったのが特徴です。ここでとくに特徴のあった支店を紹介します。

橘支店では管轄内の2つの町会と連携して、学校が夏休みの8月10日（土）に地域の子どもたちを対象に「千年・新作・ＪＡ夏まつり」を実施しました。内容は、スイカ割りやミニトマトすくいなど子どもたちが楽しめるイベントで、地域の子どもたちを中心に約700名が参加し大盛況でした。また、小向・みなみ支店では川崎市市制100周年を契機に開催する「全国都市緑化かわさきフェア」を盛り上げるために、運営委員、職員、地域住民が一体となって寄せ植えを実施し、支店を華やかに飾りました。製作者に寄せ植えを返却したあとも、それぞれの寄せ植えの写真をパネルにして支店のロビーに掲示しています。来店誘致にもつながっている協同活動です。また、支店以外でも文化活動や協同活動を本店

の各部署で開催しています。昨年８月には組合員対策室が旗を振り、大型農産物直売所「セレサモス」麻生店、宮前店の来店誘致策として「夏休みはセレサモスにれっつごー！」という企画を実施しました。

これは、さまざまな部署がセレサモスを会場としてイベントをおこなう内容であり、業務部では子どもたちの金融リテラシーの醸成を目的に「子ども金融セミナー」を開催。総務部では、Ｊ１リーグの川崎フロンターレの冠試合「ＪＡセレサ川崎エキサイトマッチ」時に、試合会場の等々力競技場イベント会場で出張セレサモスを実施。販売対策部は交通マナーや交通ルールを楽しく学ぶ「アンパンマン交通安全キャラバン」を実施しました。

組合員対策室も８月３日（土）・４日（日）に「セレサモス」麻生店・宮前店の両店舗でちゃぐりんフェスタを開催しました。昨年までは宮前店でＪＡ職員のみで開催していましたが、今回は内容も大幅にリニューアルしました。

組合員組織である「ふるさとの生活技術指導士の会」に講師を依頼し、親子料理教室を実施。『ちゃぐりん』を参考にし、市内産枝豆を使用した白玉ずんだを作りました。また、多肉植物を作っている組合員に協力してもらい、多肉植物の寄せ植え体験もおこないました。さらには、職員が過去３年分の『ちゃぐりん』を読み返し、２０２２年１２月号から見つけた「ソルトキャンドル」作りをおこないました。メダカの繁殖をしている青壮年部員に梶組合長自ら依頼し、メダカすくいも実施。子どもだけでなく大人にも人気のイベントとなりました。

また、コンサルティング部と連携して金融相談ブースを設置すると後日近隣の支店において投資信託の契約につながりました。さらに、当日は川崎市を拠点としているバレーボールチームのＮＥＣレッドロケッツ川崎の選手も応援に駆けつけ、子どもたちとふれあってくれました。

社会福祉協議会とも連携し「子どもの虐待のない社会の実現」をめざすオレンジリボン運動のブースを設置し、運動をＰＲ。ちゃぐりんフェスタの売上金全額を社会福祉協議会に寄付しました。

ちゃぐりんフェスタの運営に関しては組合員対策室の職員が５名しかいないため、初めての試みとして各部署に強制的に依頼するのではなく、本店内で手あげ方式による人員の募集を行いました。休日に開催したのもありましたが、さまざまな部署から１７名の職員が率先して手をあげてくれました。自ら進んで参加してくれているので、職員も積極的に子どもたちや来場者とふれあっていました。「室長、ふだんとちがった仕事ができて楽しいです！」と言われたときはこちらもうれしい気持ちになったのを思い出します。最終的には猛暑にもかかわらず両日で約１,０００名の方がちゃぐりんフェスタに参加し、大盛況で終わることができました。

以上のように「夏休みはセレサモスにれっつごー！」を実施した結果、セレ

サモス両店では8月のレジ客数が前年比約5,000人増加、前年比売り上げは約790万円増加となりました。

このような内容以外にもさまざまな文化活動や協同活動を実践していますが、共通して言えることは事業面も意識をして実施をしているということです。支店においては活動のさいにかならずチラシや事業の案内を併せて配布し、協同活動で作った農作物を窓口で配布し来店誘致を図るなどの取り組みを実施しています。これは今までＪＡセレサ川崎が培ってきた事業にたいする取り組みが浸透しているといえます。まさに第30回ＪＡ全国大会決議の「協同活動と総合事業の好循環」の実践につながっていると感じています。

ＪＡセレサ川崎は誕生以来、事業面においてはつねに力を入れて経営をおこなってきました。このことは強固な事業基盤につながり、安定した収益を上げることができていました。

しかしながらコロナウイルスの影響や金利のある世界への突入などにより、経営環境は大きく変わってきています。今後もより厳しい経営環境が想定されます。これからも組合員といっしょにこれらの状況を乗り越えられるよう、組合員とのつながりをより強固なものにすべく「協同活動と総合事業の好循環」に取り組んでまいります。

普及・文化活動の部

●家の光協会会長特別賞

組織活動「日本一」への挑戦

愛知県

吉村 由紀子（50）

所属ＪＡ　ＪＡあいち中央
所属部署　安城西部ブロック
組合員数　64,126名（うち正組合員13,955名）

私たちＪＡあいち中央には今、大きな目標があります。それは、「農業」、「くらし」、「組織活動」で「日本一になる」ことです。このことは、組合長のトップメッセージとして『家の光』2024年12月号のＪＡリーダーインタビュー「きた道　ゆく道」にも掲載されています。

ＪＡあいち中央は、愛知県のほぼ中央に位置し、豊かな水利に恵まれた大地と自動車産業に下支えされた、碧海５市にまたがる農と住の調和がとれた地域です。

ＪＡあいち中央の組織活動は、中期計画に基づき、年度ごとに掲げられる活動テーマに基づいてスタートします。今年度のテーマは、「『対話からつなぐ』そして『意志反映・参画』」です。

具体的には、組織活動を通じて参加者自らが、アクティブメンバーシップ意識を高め、ＪＡがプロデュースする農産物ブランド「碧海そだち」を基軸として「食」・「農」・「健康」につながる活動を展開しています。

この基本テーマに沿って、『家の光』をツールに、女性組織イキイキレディース、フレミズの森、食農教育、助け合い活動組織など、さまざまな企画をコーディネートするのが、私たち１２名のくらしの相談員の役割です。管内２９支店を分担し、ふれあい担当、本部の組織生活課と共に、総勢５２名がＪＡあいち中央の組織活動を支えています。

まずは、対話からつなぐ組織活動の一例を紹介します。

現在、くらしの拠点であるすべての支店には、目的別組織やサークルの代表者、女性総代、女性理事で構成する「がやがやワクワク会」を設置しています。

この活動は、組織活動の理解者と参加者の裾野を広げるために、支店を舞台に“生きがい”や“仲間づくり”に向けてなにができるのか話し合いをおこないます。

そのときに頼りになるのが『家の光』です。実際に、“がやワク”のメンバー自らが講師となり、『家の光』の記事を活用して、親子食育教室やハンドメイド講座を主催し大活躍をしています。

こうした活動の成果を発表する機会として「家活コンテスト」を開催し、今年度は１２０点もの作品の応募がありました。人気投票をおこない、優秀作品は女性大会で表彰をしました。

もう１つの活動は、「女性大学ときいろカレッジ」です。受講期間は約２年になります。女性理事をアドバイザーとして迎え、メンバーは、ＪＡ全域から将来の活躍が期待される女性組織のリーダー候補者を選抜して構成しています。これまでに、現在の３期生を含めると総勢５９名の女性リーダーを育成してきました。

役員、起業家として必要な事業計画の策定・管理、マーケティング、プレゼンテーションスキルなどを専門家を招いて学びます。

第３期には、「碧海そだち」の農産物を素材にしたスイーツの企画・開発をテーマにしました。食品加工メーカーの技術者や営農部門の職員を交えて検討しましたが、なかなかよいアイデアが浮かびません。そこで、『家の光』のバックナンバーをテーブルに広げました。受講生が注目したのは『家の光』２０１９年７月号掲載のレシピ「焼かない夏のケーキ」でした。

これを参考に材料や加工にかかるコスト計算から販売方法までを検討し、試作を重ね、この春には商品化する予定です。

さて、くらしの相談員の１人として私が担当する安城西部ブロックの活動についてもご紹介します。私は今年度の活動テーマを「食・農・健康！　プラス２の活動をめざして！」としました。プラス２とは、１つめに支店職員を組織活動に巻き込み、幅広い人的交流を促すこと。２つめに他部署との事業間連携によって、農業への理解促進と情報共有を進めることです。

さっそく、この目標を達成するために『家の光』や『ちゃぐりん』を活用し、各部門と職員の協力を得て、農業の生産現場から食卓までを学ぶ親子食農教育イベントを企画しました。キャッチフレーズは、「“碧海そだち”を、探して、知って、作って、食べて好きになろう！」です。

地域の特産品イチジク農場の見学に始まり、産直店舗での“おつかい”体験、野菜ソムリエによる旬の野菜の調理・保存法の授業、そして『ちゃぐりん』２０１８年８月号を教科書にした「コロコロ夏野菜カレー」作り。計４部署にまたがる職員の連携により、参加した親子は濃密な１日を過ごしました。

このイベントに参加して、農業・ＪＡを好きになった方に、「フレミズの森」に入会していただいたり、支店職員に対する親しみから信用・共済事業をご利用いただいたりと、ＪＡと地域の方々との“つながり”ができました。

地区ごとの組織活動は、毎年、役員・支店長・関係者の出席のもと開催される「くらしの相談員　活動報告会」にて発表し合います。その活動報告を基に「家活グランプリ」にも積極的に応募し、最優秀賞、優秀賞、佳作と毎年入賞者を輩出しています。

こうした組織活動をサポートする職員の育成には『家の光』が活用されています。全支店では朝礼時に『家の光』の読み合わせをおこない、入組５年めまでの全職員が年に２回したためる感想文は、役員まで回覧されます。

地域に協同の輪を広げるための『家の光』普及活動について、今年度は２つの新たな取り組みを実践しました。

きっかけは、くらしの相談員の「書店では手にとる機会のない『家の光』だからこそ、まずは手に取っていただき、興味を持ってもらうことから始めよう」というひと声からでした。

さっそくやってみようとの声がある一方で、「突然声をかける自信がない。押し売りにならないだろうか」など消極的な意見もありましたが、ＬＡや、窓口経験者からのアドバイスを生かした「ロールプレイング」を繰り返すなかで、徐々に自信を深め、全員で実行することになりました。

貸し出しの対象者は、支店窓口に来店された待ち時間に『家の光』を手に取って読んでいる方。「返却はいつでも結構ですので、一度お持ち帰りになって、

ゆっくりと読んでみませんか？」と声をかけ、見本誌の貸し出しをします。

そして次の来店時に「いかがでしたか？　気になる記事はありましたか？」と感想をお伺いすることから始めます。

さらに、後方支援策として、信用部門と連携し、定期貯金金利の上乗せ条件のひとつに『家の光』の定期購読を加えました。

こうした、取り組みにより全地区で延べ300冊の貸し出しをおこない、75冊の新規購読につながりました。

2つめは、毎年おおぜいの来場者を迎えるＪＡまつりにて「家活」ブースを設け、『家の光』の展示販売をおこなうほか、地元の図書館の協力を得て「碧海そだち」特設コーナーを設置し、「家の光図書」の農業関連書籍を集めて展示・貸し出しもしました。

このほかに、先の定例理事会では、担当常務から全役員に記事紹介をし、見本誌を配布しました。

そのさい、常務からは、「みなさんはすでに『家の光』の購読者ですが、ぜひ、この1冊はご近所やお知り合いの方にプレゼントし、今度はみなさんお一人お一人が『家の光』の記事活用を通じて協同の輪を広げてください」と紹介いただきました。

最後に、組織活動「日本一」に向け、私たちくらしの相談員の取り組みは次のステップへと階段を上ります。

これまでの対話活動をいっそう強化し、組合員と職員が手を携え、「地元の農業と協同の仕組みは、かけがえのない地域の財産」であることへの理解者を増やし、参加から参画へとつながる仕組みづくりを発展させていきます。

そして、これまで培ってきた組織活動が、大地に栄養を与える有機肥料のように、ＪＡ全体に広がり、みんなの笑顔が支店を舞台に輝くとき、めざす「組織活動・日本一」を達成できると確信しています。